

# 「教職実践演習」の成果と課題に関する覚書

Results and Tasks of Seminar for Preschool and School Teatures Practice

遠藤由美

ENDO Yumi

## はじめに

筆者の本務校である日本福祉大学子ども発達学部では、保育専修において、幼稚園教諭と保育士資格の取得ができる。

「教職実践演習」は教員免許を取得するさいの必修科目だが、保育専修においては、「保育・教職実践演習(幼)」という名称とし、幼稚園教諭資格取得の必須条件としてだけでなく、保育士資格取得のためにも履修を義務づけている。開講時期は4年後期であり、学生が具体的に就職先を決定していく時期と重なるとともに、現場で働くための総仕上げをする時期でもある。そのため、この演習は、「教育者としての使命感や責任感を自覚し、社会人にふさわしい社会性を磨きつつ、子どもへの共感的な理解ならびに保育・幼児教育にかかわる実践的指導力を身につけ、4月から教壇に立つことができるようにすることを目的<sup>1)</sup>」としている。

実施より数年を経たが、演習の内容と方法は未だ試行錯誤中といえる。そこで本稿では、養護系施設など児童福祉施設への就職を主に希望する学生のクラスにおける演習の成果を記録・検討し、課題を探る。

## 1. 「履修カルテ」への取り組み

### (1) 「履修カルテ」とは何か

保育士資格・幼稚園教諭資格取得を目指す学生に、「履修カルテ」作成を行う自主的学習を求めている。「履修カルテ」は、「教職をめざす学生が、教職課程履修開始時より卒業までの間、自分の学習状況を自主管理するためのポートフォリオ(学習履歴)」である<sup>2)</sup>。大学で定められる授業以外の自主的学習を支援するために「履修カルテ」を活用し、「履修カルテ」で一定水準の自主的学習(「自己学習課題」)の到達状況が確認できない場合は、「教職実践演習」の履修登録が認められないなど、いくつかのハードルもある。

### (2) 自己学習課題

「履修カルテ」には「自己学習課題」の成果を保存する。ここでいう「自己学習課題」とは、自分で自由に課題を設定して学習を進めていくものではなく、大学側が準備した一定の課題について、学生が自己の関心に基づき選び取り組んでいくスタイルで進められるものである。「自己学習課題」は、表1のように設けられている<sup>3)</sup>。横軸は、「教師・保育士としての基礎的力量」として、「A.教

師・保育士としての使命感や責任感、B.社会人としての社会性・対人関係能力、C.乳幼児・児童・生徒理解の能力、D.教師・保育士としての実践的指導力」をその内容とする。縦軸には「1.入学前の経験、2.大学での授業等、3.課外活動等」があり、この3つが4つの基礎的力量をいつでもどこで身につけるかを表す。この縦と横で12の学習ユニットができる。これに、「4.指定文献の学習」を含めると13の学習ユニットとなる。表1の学習ユニットのなかに書いてあるのが「自己学習課題」である。

レポートや作品課題の条件の詳細は、学生向け解説書「保育専修2013年度版 履修カルテの記入及び利用方法において」のなかで次のように説明している<sup>4)</sup>。

- ①A-1「どのような教師・保育士になりたいと思って入学しましたか」、C-1「これまでであった指導者からどのような影響を受けましたか」、D-1「これまでの学びでもっともおもしろかったもの、得意なものは何ですか。紹介してください。」が必須課題であり、時期的にも「1年前期に終了すること」(めやす)としている(字数は、各1200字程度)。
- ②B-2「授業で自ら企画したイベントや体験から学んだことを述べなさい。」は総合演習や専門演習でのゼミ活動を含むこととするが、イベントを企画し運営した者に限定する(字数1200字程度)。
- ③D-2「教育実践や保育実践に関わる授業で、新たに学んだことを述べなさい」は、講義・演習(原理・制度系を除く全科目)から1200字、教育実習、保育実習から1200字のセットとする。ただし、授業で制作した作品、演奏した楽曲、教育実習で作成したり使用した教材・教具・指導案等のデジタルデータ(文字、映像、写真、音声)で代えることができる。提出の際に400字程度の解説をつけること。
- ④B-3「授業以外で自ら企画したイベント(FD,ゼミ交流会など)から学んだことを述べなさい。」はB-2同様イベント企画者に限る(1200字程度)。
- ⑤C-3「課外活動等で学んだ『乳幼児・児童・生徒理解』の方法について述べなさい」、D-3「課外活動で、新たに学んだ科学・文化・スポーツに関する知見について述べなさい」については、課外活動で制作した作品、演奏した楽曲、保育日誌・おたよりのデジタルデータで変えることができる。提出の際に400字程度の解説をつける。
- ⑥4「指定文献の学習」は必須。教員が推薦した文献リストから専門編、教養編それぞれ5冊程度、計10冊以上とする。リスト

表1 日本福祉大学子ども発達学部同学科保育専修「履修カルテ」自己学習課題

別表

自己学習課題	A. 教師・保育士としての使命感や責任感	B. 社会人としての社会性・対人関係能力	C. 乳幼児・児童・生徒理解の能力	D. 教師・保育士としての実践的指導力
1. 入学前の経験	どのような教師・保育士になりたいと思って入学しましたか。(必須)	高校までの学級活動、児童会・生徒会活動、サークル、ボランティア、自主的な社会的活動でどういうことを学びましたか。	これまで出会った指導者(教師・保育士・指導員、塾講師、スポーツクラブ、サークル等)からどのような影響を受けましたか。(必須)	これまでの学び(学校の教科に限らない)でもっともおもしろかったもの、得意なものは何ですか。紹介してください。(必須)
2. 大学の授業等	授業で教師・保育士のあり方・能力について学んだことを述べなさい。	授業で自ら企画したイベントや体験から学んだこと(ISなど)を述べなさい。	授業等で学んだ「乳幼児・児童・生徒理解」の方法について述べなさい。	教育実践や保育実践に関わる授業で、新たに学んだことについて述べなさい。
3. 課外活動等(ボランティア、サークル、アルバイトなど)	課外活動で考えた教師・保育士のあり方・能力について述べなさい。	授業以外で自ら企画したイベントから学んだこと(FD、ゼミ交流会など)を述べなさい。	課外活動等で学んだ「乳幼児・児童・生徒理解」の方法について述べなさい。	課外活動で、新たに学んだ科学・文化・スポーツに関する知見について述べなさい。
4. 指定文献の学習	一般教養、専門(教科の専門内容に関わる文献、指導法に関わる文献)(別表D)(必須)			

日本福祉大学子ども発達学部子ども発達学科「保育専修 2013年版 履修カルテの記入及び利用方法について — 保育・教職実践演習(幼小) — 」

未掲載の文献についても、卒業研究で使う文献をゼミ教員が「指定文献」として認めれば、4冊までの範囲で学習課題対象文献とすることにした。

この自己学習の進め方として、13の学習ユニットから、先に示した必須3課題と「4」を必ず入れて自己学習計画を立てることとしている。「教職実践演習」の単位修得のためには、一定の時期に一定の課題をクリアしつつ課題に取り組むことが求められる。保育専修では、たとえば4年後期の「教職実践演習」の登録条件は4年前期終了までに、13課題中8課題達成、「教職実践演習」の単位認定の条件は、13課題中10課題の達成としている。

課題は、WEB上に作成された各自のフォルダに学生が保存する。

4年間の学生の「教師・保育士」としての成長過程を教員(主として各学年のゼミ担当教員)と学生で共有することが重視され、ゼミ担当教員は定期的に担当学生のフォルダを閲覧し、提出された課題に目を通し、合否をつける。合格の場合は学生の課題達成一覧表に記入し、不合格の場合は、学生に通知し、不合格理由を告げて再提出を求める。基本的に段階を踏んで学習を蓄積することが目的であるため、不合格のまま放置しないことが重要である。担当教員は、合格水準に達するまで繰り返し、指導を行う。

## 2. 「教職実践演習」の概況

「教職実践演習」は、前述した「履修カルテ」課題8課題を達成した学生が、履修登録をすることができる。

保育専修では、100名～120名の学生を5クラスに編成し、演習を行っている。クラス分けを就職先施設種別に添う形で行い、4月1日、現場に出たときにより効果的に活かせるようにしている。

演習の運営方法について、最初の2年間は、5人の教員が「保育・教職実践演習(幼)」としての学習目標を共通認識としたうえで、具体的な授業運営は、そのクラスに配属された学生の就職先特徴と教員の専門性を生かす形で行ってきた。ここ数年は、合同の取り組み実施による共同化も図られている。

表2 「保育・教職実践演習(幼)」養護系クラス演習一覧

2014年度まで			
回数	概要	進行・講師	テーマ
1	オリエンテーション	授業担当者	オリエンテーション(授業の概要・進め方)
2	ワーク	同上	児童養護施設当事者(卒園者)の手記
3	報告討論	同上	保育・養護における運動に取り組む意味
4	報告討論	同上	運動会の意義と役割
5	見学	同上	T保育園運動会見学報告
6	報告討論	同上	保育士実践記録(年長クラスの保育)
7	報告討論	同上	保育士実践記録(異年齢保育)
8	ゲスト講義	ゲスト講師	T保育園運動会企画保育士の実践講義
9	報告討論	同上	施設における子どもの暴力問題
10	報告討論	同上	児童養護施設当事者の手記の報告
11	報告討論	同上	児童養護施設における自立支援実践
12	報告討論	同上	児童養護施設における家族への支援実践
13	報告討論	同上	地域小規模児童養護施設における実践
14	報告討論	同上	施設における「安全・安心」への取り組み
15	報告討論	同上	子ども・職員集団づくり実践

2015年度			
回数	概要	進行・講師	テーマ
1	オリナゲスト講義	担当者・講師	オリエンテーション+母子生活支援施設の現状と職務
2	パネルづくり	授業担当者	里親開拓事業用「社会的養護」パネルづくり
3	パネルづくり	同上	同上
4	パネルづくり	同上	同上
5	ゲスト講義	ゲスト講師	「保育実践で大切にしたいこと」講義
6	振り返り討論	授業担当者	「困った子」ととらえない子ども観等討論
7	ゲスト講義	ゲスト講師	「男性保育士として働くこと」講義
8	振り返り討論	授業担当者	講師の実践記録、男性保育士が働く意味の検討
9	DVD視聴討論	授業担当者	「居所不明子どもへの対応」保育士の役割検討
10	ゲスト講義	ゲスト講師	「職員集団づくりの大切さづくり方」講義
11	振り返り討論	授業担当者	若手施設職員の事例検討を通して
12	ゲスト講義	ゲスト講師	「新任保育者として現場に出るために」講義
13	振り返り討論	授業担当者	小4女児の事例から自己肯定感のとらえ方検討
14	キーワード討論	授業担当者	「家庭」「家族」「ふつう」とは何か検討
15	まとめ	授業担当者	学んだことと今後の課題整理

2016年度			
回数	概要	進行・講師	テーマ
1	オリエンテーション	授業担当者	オリエンテーション
2	絵本選択	同上	250冊の中から好きな絵本を1冊選ぶ
3	ゲスト講義	ゲスト講師	「児童養護施設で働くために」講義
4	振り返り討論	授業担当者	「ライフヒストリー」に取り組む意義討論
5	絵本活動	授業担当者	お気に入り絵本の読み聞かせ、絵本制作構想
6	ゲスト講義	ゲスト講師	遊びのプロと多様な「遊び」を楽しむ「講義」
7	振り返り討論・絵本	授業担当者	「遊び」の復習、絵本読み聞かせ、絵本制作
8	ゲスト講義	ゲスト講師	「母子生活支援施設とは」講義
9	振り返り討論・絵本	授業担当者	母子支援の意義討論、絵本読み聞かせ・制作
10	ゲスト講義	ゲスト講師	「新任保育者として現場にでるために」講義
11	振り返り討論・絵本	授業担当者	自己肯定感の検討、絵本読み聞かせ・制作
12	ゲスト講義	ゲスト講師	マリリン・バスターフィールドの演奏・講義
13	絵本活動	授業担当者	絵本読み聞かせ・制作
14	振り返り討論・絵本	授業担当者	奏者からの解説と振り返り、制作絵本の交流会
15	まとめ	授業担当者	制作絵本講評、児童養護施設卒園者の手記に学ぶ

遠藤由美作成

筆者が担当する養護系等児童福祉施設への就職者を主とするクラスにおいては、マイナーチェンジを重ねてきている。その変更は、2014年度まで、2015年度、2016年度実施の3種に分けることができる(表2参照)。

### (1)3期それぞれの特徴

2014年度までは、配属された学生の就職先として、養護系施設が多いものの保育所への就職先も一定の割合を占めていたため、保育所保育実践と児童養護施設実践の検討が行える内容とした。

2015年度からは、それまでと大きく異なる授業運営方法が採られている。ゲスト講師を5人招いて、5クラス合同で講義を受け、講義後のクラスごとに演習で振り返りを行うという形式を取り入れたことが、大きく異なる点である。1)5人のゲスト講師をどのようなねらいで招くのかポイントの1つであり、2)ゲスト講義と振り返り以外の演習授業をどのような内容で構成していくかがもう1つのポイントとなる。

1)について、ゲスト講義のテーマとしては、2015年度、児童福祉施設1カ所、保育所4カ所から講師を招き、「新任保育士が働くために、今身についておいてほしいこと」についてそれぞれの立場や専門から講義を求めた。2016年度は、合同ゲスト講義を座学として耳で聴く講義にとどめず、感性を活用し、「こことからだ」を動かして楽しみ学ぶ講義も含めて構成した。

2)については、2015年度は、①見えにくい問題をとらえ、専門職同士連携していくことの大切さを確認する、②実際に自治体で取り組まれている「里親開拓事業」に資料づくりで参加する、③今進められている「社会的養護」施策のキーワードのとらえ直しをする、という3点に取り組み、2016年度は、①好きな絵本選びと読み聞かせ実践、②自分自身で絵本制作に取り組んだ。

全体を通して、保育所、養護系施設いずれに就職するにせよ、重要になってくる子どもの見方、表現のとらえ直し(自己肯定感の育み方)を問うものになっている。



### 3. 時期ごとにみる演習の実際

#### (1) 2014年度までの演習の特徴

学生の状況から、この年までのクラスは、保育所就職者と施設就職者の混合クラスであった。このことから、演習の内容を前後半で分けることとした。前半で保育実践を、後半で養護実践の学習機会を準備した。

#### 〈前半：保育実践〉

前半においては、現場の実践を深く学ぶために、季節的にちょうどタイミングよく開催される運動会に見学参加することを通して、行事への取り組みについて具体的な実践内容を深めることをねらいとした。

前半の保育実践の検討は、いくつかのフェーズをもって展開した。①運動・スポーツに取り組む意味、②運動会行事に取り組む意味を検討したうえで、③見学先保育所の保育実践事前学習、④運動会を見学し、見学後、どのような意図で行われた運動会だったのかを検討する。その後、⑤実際の運動会企画担当者に企画のねらい等について、講義を受ける、という構成である。学生のとらえと現場のねらいを突き合わせる事が可能となり、今後に活かせる。

「運動・スポーツに取り組む意味」「運動会行事に取り組む意味」については、学生の報告担当者にレポートする文献選定から任せてそれぞれの「意味」について提案を受ける。その上で、提案を深めるためにグループ討論を行った。その際、「保育実践における」意味と「養護実践における」意味の違いの有無にも着目しながら検討することにした。

「見学先保育所の保育実践事前学習」については、当該保育所が所属する社会福祉法人が実践記録集を出版していたので、そこに掲載された実践記録を検討することにした。社会福祉法人新瑞福社会編集の『まあるくなれ わになれ』（新読書社、2013年）から、運動会を見学する保育所の特徴である3～5歳の異年齢保育実践をまとめた青山均保育士の「共同画製作の取り組み みんなで考え みんなでつくる」と、この年運動会の企画担当責任者であった伊藤シゲ子保育士（現在、筆者本務校の保育専修授業「保育と環境」非常勤講師）の運動会までの実践をまとめた「奥深きやさしさをもつ本当のかぶらをめざして」を取り上げ、検討した。

運動会は、日曜日開催であり、現地が美浜キャンパスからは離れた名古屋市内の保育所であることから、見学は、参加必須ではなく、希望者参加の形をとった。実際の運動会を見学できる機会はめったにあるものではないことから、クラス20数名のうち8人

程度の参加を得た。その後の授業「運動会見学と報告・検討」で、見学者が撮影してきたビデオの上映を行ったうえで、運動会の特徴（「種目にストーリー性があった」「音響担当の職員がおり、曲の工夫を行うとともに、種目のねらいを放送していた」「個人種目（竹馬や缶ぽっくりなど）では子どもの登場する順番に工夫がされていた」「職員紹介も含めた職員による出し物があった」「おもむつ替え用のテントが設置されているなど、乳児のいる保育所としての配慮が行われていた」）を報告するとともに、見学者の感想（「子どもが意欲的に取り組んでいた」「緊張気味の子どももいたが、『やりきったぞ』という笑顔の子どもや達成感の子どもがたくさんいた」「障害児も一緒に種目をする自発的な姿があり、集団としての結びつきがみられた」「自分以外の子どもにも声援を送る保護者の姿があった」）をふまえ、「運動会で大切にしていること」を確認し、クラス全体で共有した。ただし、報告者以外の学生から出された運動会への質問のうち、見学者に答えられないものがあった。これについては、企画した保育士のゲスト講義の際に質問することとした。「運動会企画保育士によるゲスト講義」では、運動会のねらい（年間計画との関連、一人ひとりの子どもの課題とそれに取り組むための保育士集団の取り組み）など、授業での検討をはるかに超えた内容が紹介された。

#### 〈後半：養護実践〉

後半の養護実践の検討については、ゲスト講師を呼ぶなどの特別講義は企画できなかったが、養護系施設現場で論点となっている問題を取り上げ、議論を黒板全面にまとめ、教員がコメントして理解を深めた。

3冊の文献を検討素材として取り上げた。養護実践を展開する際に、もっとも大切にすべきものは、そこで暮らしている子どもたちの姿・声・気持ちである。後半のスタート素材としてまず取り上げたのは、『作文集 しあわせな明日を信じて』である。これは、児童養護施設で育っている子どもと、施設を巣立った人の手記・作文集であるが、それだけではない。子どもたちの手記・作文に続いて、その子どもの養護・養育を担当した施設職員が子どもへの養護・養育について手記・作文もふまえてコメントを書き、さらにそれらをふまえて、1事例ずつ「社会的養護」に関係する研究者がコメントするというそれまでに例を見ない構成で編まれた作文集である。ここから2事例取り上げて検討した。当事者と養護・養育者の手記があることにより、それぞれの思いが立体的に理解でき、さらに研究者の解説があるので、理論的な理解が深まる。

その他、養護実践については、『社会的養護内容 子ども集団づくり』から「自立支援」「家族への支援、障害児への支援」「地域小規模児童養護施設の取り組み」「子ども・職員集団づく

りの実践」に関する実践を検討し、『子どもと福祉』から「子どもの暴力問題を考える」「『安全・安心』への取り組み」論文を取り上げた。養護実践の検討としては、3年次に開講されている「社会的養護内容」演習の授業においても、実施してきている。4年次後期のこの時期に検討する際には、たとえば「施設のルールを子どもと一緒に作る」「家庭的な雰囲気大切にしたい働きかけをする」などという意見に対して、それを具体的にを行うには、次に何をするか、行動目標を具体的に抽出する作業を検討する。そのことによって、現場で子どもたちを前にしたときの具体的な行動を想定するトレーニングを深めた。

## (2)2015年度の演習の特徴

第2ステージに入ったとも言えるこの年は、5回の合同授業と10回のクラス授業という形態をとった。15回の授業のうち、5回を合同のゲスト講義とし、ゲスト講義翌週の授業を(原則的に)ゲスト講義の振り返り授業と設定した。ゲスト講義としては、現場で実践する保育者を招き、講師がそれぞれの現場実践の紹介をするとともに、それぞれの立場から新任職員に求められる資質等について講義を行う。翌週の振り返りは、各クラスで行う。ゲスト講義時に受講学生がまとめたレポートを教員が検討し、重要と思われる論点を抽出、議論した。議論は、まず数人の小グループで行い、そこで出された意見を発表、黒板に書き出し、さらに気になる点について全体で意見を交換する形をとって、共有した。

### 〈ゲスト講義〉

ゲスト講義を合同授業とすることで、5人のゲスト講師を招くことができた。そのため、学生が現場の迫力をじかに受け取ることが可能となり、翌週の振り返りの議論が、より現実に即して考えることができたといえる。「養護」系施設に就職する学生からすると、就職先で具体的に生かすことのできる内容としてとらえることが困難になる。そこで、保育所現場の講義であった性格を「施設版」でとらえ直す必要があった。それぞれ語られた内容と講師・講義に対する学生の感想をもとにしながら、振り返りの演習では、「養護」系現場でどのような問題としてとらえられるかという観点から、論点を提示して議論した。

たとえば、第2回ゲスト講義「保育実践で大切にしたいこと」をふまえては、施設で暮らす「子どもをどうとらえるか」「子ども同士の関係を育むためには」、第3回ゲスト講義「男性保育士として働くこと」をふまえては、保育士・児童指導員として男女職員がすでに同等に働いている「養護」系現場で、「男女で働き方・役割の違いはあるか」、第4回ゲスト講義「職員集団づくりの大切さづくり方」をふまえては、「職員集団づくり」の重要性については共通課

題であるが、ここでは特に「若手施設職員が自分の意見を出しにくい事例」を提示し、検討した。第5回ゲスト講義「現代社会での保育の役割—少子化核家族化の中の子どもたち—」をふまえては、講師より提示された「自己肯定感」内容について、「自己充実感」と「自己安定感」の違いを確認し、「保育・養護実践としては、子どもを『どうさせるか』ではなく、『どう見るか』が重要になること」を確認したうえで、小学校4年生女子の学校教員に理解されず、自己否定に陥る事例の検討をした。これらのゲスト講義をふまえての演習では、討論材料として実際の実践事例(特定非営利活動法人子どもサポートネットあいち編『児童養護施設の若き実践者のために どうしよう こんにちは!!』三学出版、2011年)を取り上げ、まず論点について議論を行い、その後、実際に当事者がどのように実践し、どのような経過を生み出したのかを共有した。そのうえで、これら実践の成果と課題をまとめる形をとった。

### 〈ゲスト講義・振り返り以外〉

ゲスト講義と振り返りを除く授業では、①養護系現場につながるために、里親開拓事業への協力、②子どもをめぐる最新事情「居所不明の子どもへの対応」理解、③施策推進のキーワード検討(「家庭」「家族」「ふつう」とは何か)、④総まとめを行った。

②の「居所不明の子どもへの対応」理解については、「居所不明の子ども」の存在自体を知らない学生も多いので、まず問題を知るために、社会的にも注目されることになった学校教育基本調査発表後に制作された特集番組(NHK「あさいち」「行方不明の1191人の子どもたちは今どこに?」2012年5月6日放映)を視聴した。そのうえで、家庭と学校と地域の関係の途切れによって発生している部分も大きいことを確認し、子ども家庭福祉の問題としてとらえ、養護系の専門職として他機関との連携にあたっての課題を討論・共有した。

③については、イメージで語られるキータムについて、こだわって検討すること、子どもたちの生活や育ちにとって、大切な援助について具体的にとらえることの重要性を再確認した。

①については、名古屋市の児童相談所職員からの協力依頼を受けて取り組んだものである。名古屋市では、近年里親制度の普及に取り組んでいる。2014年度に続き、2015年度も里親制度普及事業として「あいフェスタ2015」を開催することになったため、演習における活動を通じて協力したものである。依頼内容は、10月に名古屋市内のイオンモールナゴヤドーム前ノースコートで開催される「あいフェスタ2015」の企画会場に設置される里親制度紹介の展示パネルを制作することである。「社会的養護とは?」「里親とは?」「誰でも里親になれるの?」「どれくらいの期間預かるの?」などQ&A方式で示された内容を記すとともに、内容に添っ

たイラストをつけることが求められた。演習クラスをグループに分け、人の目を引き、立ち止まってでも読みたくなるような眺めたくなるようなパネルづくりを目指して制作した。企画開催日は、日曜日であったが、参加可能な学生が早朝から集まり、パネル展示をするのと同時に、学生自身もあいフェスタ企画「里親経験者からのメッセージ」「社会的養護における里親の役割を語る草間吉夫さん講演」に参加して、里親普及のための公と民間の活動について、理解を深める経験ができた。

#### (4)2016年度演習の特徴

前年度の養護系クラスの受講学生から、年度末授業において以下の要望が出されていた。内容が重なるものをまとめて記述する。

- ・ ゲスト講義は刺激的だった。新入社員としての心構えを学べた。
- ・ ゲスト講義、心に残った。翌週意見を出し合う方式も、もう1回思い出すことができた。違う意見も聞けたのでよかった。
- ・ ゲスト講義の内容は、実践に活かせるものがある。身につけられるように聞くとよい。
- ・ ゲスト講義、ものの作り方を教えてもらえてよかった。
- ・ ゲストが園長や男性保育士など多様だった。若い保育士など来てくれるとよい。内容をうのみにするのではなく、持ち帰って(翌週討論して)広がった。いい保育の方向が出せる。
- ・ ゲスト講義、施設の話をもっと聞きたかった。増やしてほしい。
- ・ 就職前に現場からのことば、身になった。翌週の話しいも良かった。クラスサイズを半分にはできないか。
- ・ 内容の振り返りを講義直後にできたらよい。そのとき感じたことをその場で共有したかった。クラスサイズを小さくしてほしい。絵本・手遊び、学生が先生たちの部屋を廻って学ぶ機会があるといい。
- ・ 事例検討も良かった。

これらの要望のうち、クラスサイズの縮小や振り返りを講義直後に行うための連続時限開講については、保育専修内、学校教育専修・他学科の時間割と講義室の調整上、すぐに実現することは不可能だと判断した。内容的な部分で学生の意見をいくつか2016年度取り入れた。5クラス合同の企画として、①ゲスト講義の継続、②ゲスト講師に施設系講師を増加、③ゲスト講義内容として遊び・音楽など感性を磨くもの・現場の専門家に学ぶ形式の導入を、演習担当者会議で検討・決定した。2016年度は、合同ゲスト講義を座学として耳で聴く講義にとどめず、感性を活用し、「こころとからだ」を動かして楽しみ学ぶ講義も含めて構成したことになる(表2参照)。

#### 〈養護問題と援助の視点〉

養護系講師としては、従来の母子生活支援施設母子指導員による講義に加えて、児童養護施設児童指導員による講義を設定した。新たに設定した後者については、次のような内容について講義を依頼した。児童養護施設で働くということが、特に保育所・幼稚園と異なって学童以降高校生まで養育することになるので、思春期・青年期の子どもたちへの養育の実践課題に着目した内容とすること、青年期の子どもたちの自立にむけた生活史学習のために、近年現場で「ライフストーリー」実践が目ざされ取り組まれているので、その実践の紹介を含めること、「施設」で働くということが、複数の職員によって同一の子どもを養育することになるという特殊性、「養護労働」に携わるという特殊性から、重視される子どもたちに関する情報共有の重要性を身近な例をもとに示すこと、である。これらの内容について学生の理解を深めることをねらいとした。

第3の「ゲスト講義内容として遊び・音楽など感性を磨くもの・現場の専門家に学ぶ形式の導入」としては、5回のゲスト講義のうち、2回を使って行った。一つは、「遊び」のプロを招き、学生たちが実際に遊ぶことを通じて、「遊び」のワクワク感、創造性などを学ぶ企画である。「ラッキィセブンじゃんけん」や「自分のおでこにはってある『ことば』当てワーク」「誕生日同一グループによる誕生日身体表現」などに取り組んだ。二つ目は、「音楽」を楽しむ企画で、学内にある文化ホールに場所を変えて、音楽演習授業の非常勤講師に本来専門とする楽器の演奏コンサートを開催していただいた。マリンバとスティールパンの奏者である講師によって、それぞれの楽器によるクリスマス音楽の演奏が行われたり、その楽器の音を楽しみながら、その特徴の説明を受けたり、カスタネットを自分たちで組み立てて、マリンバと一緒に会場一体となって合奏をするなどした。

合同ゲスト講義とその振り返りのクラス演習の他には、大きく2つの課題に取りくんだ。一つは、養護系クラスであることの特徴から、最終回に「児童養護施設高校生の手記に学ぶ」をテーマとして、養護問題としてはやや重篤な問題を抱えている高校生が書いた手記を取り上げて、まとめの講義を行った。今一つは、「表現」(感性)を磨くことをテーマに、①好きな絵本選びと読み聞かせ実践、②学生自身による絵本作成である。

「児童養護施設高校生の手記に学ぶ」で取り上げた手記は、本人の生育歴における困難の深刻さと児童養護施設を複数経験する中で客観的な施設観を率直に述べたものである。いわゆる非行のある少年が、非行に至る経緯と児童福祉施設とくに児童自立支援施設ではなく児童養護施設で自分自身を見つめ直し、未来に希望を持って進もうとしている姿勢を書いている。また



経験した複数施設における職員のチームワークの違いが子どもの職員観、養護観に決定的な違いをもたらしていることが示された。教員からは、未来に希望を持って進もうとしていた高校生が、その後必ずしも順風満帆ではなく、むしろ嵐の中に置かれ、「めでたしめでたし」で終われるものではない、人生は続いていくものであること、その際、本人が書いているようにそれまで様々な人たちが高校生に関わってきたからこそ高校時代の本人がおり、そうした周りの支えは今後も必要不可欠であり、施設を始め、社会福祉関連の専門職はもちろん、さまざまな場で出会う人との関わりの質が問われるものであることを伝えた。

15回の演習のまとめの感想レポートの中にYくんの手記を取り上げたものが数多くあった。その中から、いくつか取り上げてみると次のようである。「Yくんの手記を読んで、このようなことはやっぱりいろいろな施設で起きているのだなと感じました。私たちがみたら、そういう施設がある、で終わるけれど、Yくんの生活にはその施設が家ですべてで、そういうことを考えるとほんとに大きくて深刻な問題だと思う。簡単にYくんに幸せになつたほしいとはいえないけれど、ここまで考え方が変わって考えることができたのだから、プラスの方に歩いていってほしいなと感じる。そしてやはり、施設職員って大変ですごいなと素直に思いました。でもほんとに人を救う、変えることができる職だと思いました。」「Yくんの作文は、とても衝撃的でした。措置されている子どもの中でも非常に荒れている様子で、このような子どもたちに何も悪い体験をしていないおとなが寄り添おうとしてもなかなかうけ入れてもらえないだろうと感じました。ただできることは、今までひどい経験をしてきて人を信じられない子どもたちをずっと信じ、何があってもかわらず接し続けることだと思います。施設に入所中になんとしてでも自分を客観的に見られるよう、育ててほしいです。なぜなら、退所をすれば一人の大人として周りから見られるようになるからです。」「このクラスになって、児童養護に関することや、子どもへの関わり方について学ぶことができました。特に今日読んだYくんの事例については、児童養護施設の職員になる私にとって、知らなくてはならないことだと思いました。施設にやってくる子どもは、職員である大人も経験したことがないことを経験しているのだと改めて思いました。子どもの態度や言動をそのまま受け入れるのではなく、どうしてこの子はこうなっているのかなど、を知っていくべきだと思いました。」

多様な現場に巣立っていく学生たちに子どものおかれている厳しい現実を伝え、彼らに関わる者としての役割を期待していることを伝える機会とした。

#### 〈「表現」(感性)を磨く〉

「表現」(感性)を磨く演習として第一に取り上げたのが、好きな絵本選びである。この演習のときには通常の数十名キャバシテイの教室ではなく、200名入ることのできる大講義棟の部屋を特別に借り、そこにおよそ250冊の絵本を並べた(福音館出版の『子どもの友』創刊号から100号までを含む)。学生たちは、広げられた絵本群の中を自由に歩き回って、絵本を手に取り、好きな絵本を選択する。「私の好きな絵本ベスト3」を選び、その絵本の概要・特徴と好きな理由を所定の用紙に書き出した。そして、その後の授業回において、複数人数ずつ「ベスト1」絵本を全員の前で読み聞かせ、好きな理由を紹介し、共有した。

第二に取り組んだのは絵本づくりである。好きな絵本を意識化した上で、今度は、それに加えてこれまでの実習経験を振り返りながら、絵本づくりに取り組むことにした。対象年齢などは各自が設定し、「絵本」というシバリ以外は特に設定せず、自由な発想で作ることとした。絵を描くことが苦手な、「絵本づくりなんてとんでもない」と訴える学生も複数人数いたが、具象画を上手に描くことだけが絵本づくりの手法ではないことを伝え、ストーリー性や作り方(表現の仕方)を工夫することを再確認し、取り組んだ。

結果、全員が提出することができた。作品は、クラス内展示し、お互いに鑑賞した。注目された絵本を数冊紹介する(写真1)。砂糖がいろいろなものに変身することを表現した絵本『おさとうのさとうくん』では、ジュースになったり、アイスクリームになったり、みずあめになったり、ごはんになったりなどするユーモアと発想のおもしろい作品ができた。また、散歩に行きたくない犬への『ゆきのひのプレゼント』は、くつによって、寒がりの犬が散歩できるようになるお話であり、くつを提供した双子のクマの描き分けやプレゼントのアイデアを出す雪だるまなどの絵がかわいい作品となった。『うさぎ

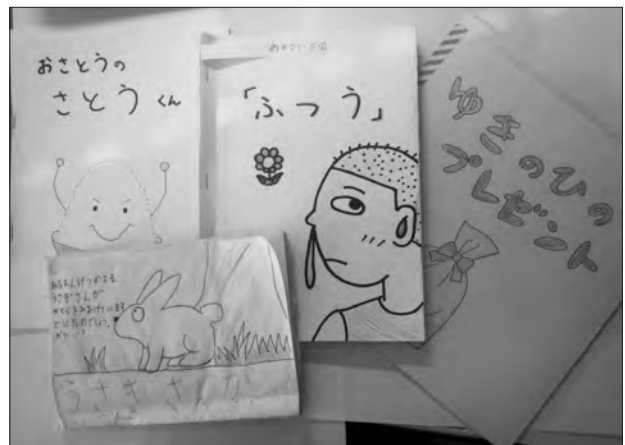


写真1

さんが…?』は、ある満月の夜、空をじっと見つめているうさぎさんが、ぐっと力を入れて大ジャンプ、どこまで行くか、というお話。勢いにびっくりする小鳥、ビルの上の人、飛行機を通り越し、宇宙まで飛び出し、月まで到達するうさぎさん。月のウサギと餅つきを楽しむスケール。横開きではなく、縦開きにしたり、構図やポーズを少しずつ変えて、うさぎさんの飛び出す様子が生き生きと描かれた。『ふつう』という絵本は、鼻を垂らした少年が、「ふつうってなんだろう。かんがえてみる」と始まり、「たかい」「ひくい」「どっちがふつうなんだろう」と考えていく。「よくわらう」「わらわない」、「ともだちおおい」「すくない」など考え、『ふつう』をいろいろかんがえたけど、ほくには『ふつう』がわからない』『もやもやするんだなあ』と終わる。

素材は(フェルトを使った布製絵本も1つあったものの)、基本的にはA3の印刷用紙や、余っている画用紙などほぼ新たなお金が発生しない範囲での取り組みだったが、構想に関する自由な討論や絵本選びの影響を受け、充実した内容になった。

まとめのレポートには、絵本づくりについて触れているものもあった。「手にとったり、読んだりすることは何度もあった絵本を、いざ作るとなるとなかなかアイデアもせず、とても難しい作業でした。しかし、『何をこの絵本を通して伝えたいのか』ということを考えていくうちに、保育者となる身として『自分は子どもたちに何を学び、伝えたいのか』という根本の部分を変えて考える良い機会にもなりました。自分の思いをかたちにすることはとても難しく伝え方によっては語弊を招いてしまうかもしれませんが、自分の思いを再確認する思いがけない発見もあり、今回の絵本の取り組みは有意義なものでした。」「4年間の中で実習や講義で読み聞かせなどを行い、絵本に触れてきましたが、自分で作るというのは初めての経験でした。意図や伝えたいことを絵やストーリーで伝えることの難しさや、いかに他人との違いを作るかなど知る良い経験になりました。」

読み手から書き手・描き手・作り手になることによって、自分自身を問い直す機会になり、さらに自分の保育観・養護観の問い直し・創造にもつながったようである。

## おわりに 三期をふまえて今後の課題

「教職実践演習」は、現場に出て行く直前に設定され、まさに現場で生きる力を養成する科目である。この間の演習実践は、年度によって試行錯誤を繰り返してきたものであるが、学生たちの就職先の多様性をふまえ、その特殊性によって求められる力と、子どもに関わる現場に共通して身につけておくことが求められる力、という2つの力の育成に取り組んできたといえる。

そこでは、子ども一人一人の発達をどのように支援するか、という観点を土台とした実践の重要性を確認し、主体的で対話的な学びを重ねてきた。さらに、保育現場・施設現場を「チーム」として重視し、チームワークによる労働を編み出していくことの課題と取り組みへの必要性を確認できたと考えられる。

ただし、これらの成果が、何年かの集積のなかで指摘できること、すなわちそれぞれの期においてそれぞれ実を結んできた内容であることをふまえると、1つの年に総合してバランスよく配置することが課題として残る。また、今回は5クラスあるうちの養護系施設に限定して検討したので、すべてのクラスを見渡した内容として検討することも求められる。

### 注

- 1) 日本福祉大学子ども発達学部子ども発達学科「保育専修 2013年度版 履修カルテの記入及び利用方法について —保育・教職実践演習(幼小)—」p1。
- 2) 前掲書、p1。
- 3) 同前、p3。
- 4) 同前、pp2～3より。省略部分もある。